

Title	初期アテーナイの植民活動
Sub Title	On the early stage of the Athenian Colonisation
Author	眞下, 英信(Mashimo, Hidenobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1971
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.43, No.14 (1971. 5) ,p.105(625)- 118(638)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19710500-0105">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19710500-0105</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 初期アテーナイの植民活動

(一)

三つの大陸に圍繞された地中海の一角を中心に開化した古代ギリシアの歴史を繙く時、我々はギリシア人が絶えず植民活動をしており特に紀元前八世紀より前六世紀は大植民活動時代と言われ、地中海並びに黒海沿岸の各地に多くの植民市を作ったことを知る。<sup>(1)</sup>ところで後に古典時代のギリシア世界の中心となったアテーナイはこの時代かなり特殊な状態にあったのである。すなわちアテーナイはこの大植民活動に殆ど加わらず、むしろ他のポリスの植民活動が下火になった前五世紀に大規模に植民市を作っている。この原因が何んであったかは難かしい問題故に、ここでは後の課題として残しておくが、<sup>(2)</sup>こうした前五世紀のアテーナイの植民市は前八世紀～前六世紀の植民市とは大変性質を異にするものであった。その特徴を要約してみれば主に次の二点が指摘出来よう。<sup>(3)</sup>第一にこれらの植民市の設立が母市アテーナイの政策と密接な関係を有していたことであり、第二にこうして作られた多くの植民市の市民は法律的にみてアテーナイの市民でもあったのである。

初期アテーナイの植民活動

眞 下 英 信

る。

斯様な特異な性格故に、当時これらの植民市は特別に *κλῆρονία* という名で呼ばれ他の一般的なギリシアの植民市 *ἀποικία* と区別されていた。この内 *ἀποικία* という呼称は主に前八世紀から前六世紀にかけて多く作られた植民市に用いられており、この形の植民市は母市とは何ら政治的なつながりはなく母市より独立した一つのポリスとして形成されたのであって、母市と植民市の間には何らの上下関係はなくもっぱら宗教的な面での絆しかなかったのである。コリントの植民市コリュキュラ人の定義を引用するならば、*“ὄν γὰρ ἐπὶ τῷ δοῦλοῦ, ἀλλ’ ἐπὶ τῷ ὀμοίῳ τοῖς κερτομένοισ ἐῖναι ἐκπέμπονται (ἀποικον).”* 即ち「植民者は母国に残った者らの奴隷ではない、同等の権利をさずかって新しい国に向うのだ。」と述べられているのである。<sup>(4)</sup>

しかしこうした植民市を二つの形に分類する考えが前七世紀、六世紀の植民市にも適用出来るかと言うとかなり疑問が生じるのである。すなわち、従来はこうした二つの植民市形態という視点

を設定して、そこから前七〜六世紀の植民市を検討している傾向がみられるが、<sup>(5)</sup>この頃の植民市はこうした二つの形の間形とも、或いはむしろ両方の性格を兼ね合せた植民市も存在したのではなからうか。ポリス社会と言っても各々のポリスには多くの異なる特性が見られる如く、我々はギリシアの植民市を考察する場合余り類型的な解釈に陥らない様に注意せねばならない。<sup>(6)</sup>

本論はこうした類型的概念では理解し難いと考えられる初期アテーナイの植民市、Sigeum 及び Chersonesos の二つを検討し、そこに如何なる性格を持った植民市を見ることが出来、そして又如何なる当時のポリス社会の特徴が見られるかを考察しようとするものである。

(一)

我々が知る最古のアテーナイの植民市は Strabon や Diogenes Laertius 及び Herodotus 等が伝えているオリンピクの優勝者 Phrynon の指導のもとに行なわれた Sigeum への植民である。<sup>(7)</sup>この植民に関して第一の問題点は植民年代についてであるが、この点従来二つの見解が対立している。一つは史料中に見られる Periandros, Alkaios 等の人名からしてソロンと同時代の<sup>(8)</sup>大体前六〇〇年前後とする碩学 E. Meyer らの説である。他のもう一つは、伝承に極端に懐疑的である Beloch. K. J. に代表される見解で、彼は第一の見解の根拠を全て否定し、ヘロドトスの文から植民年代を Peisistratos の時代すなわち前六世紀の中

頃とするのである。<sup>(9)</sup>二つの見解の内で Beloch のヘロドトス解釈が正しくないことは Page が指摘している通りであり、<sup>(10)</sup>その論証は省略するが前六〇〇年頃植民されたとする第一の説が正しいとみて良からう。特に近年発見された、Sigeum でアテーナイ人と戦った詩人アルカイオスの詩の断片中に *[Lol]yrea* の名がみられることは修復の点や同名異人の可能性などの問題が残っているが蓋然性からして Beloch 説に対する決定的反証とみてさしかえないと考えられる。<sup>(11)</sup>

ところで伝承に依ると Phrynon は六三六〜五年のオリンピクに勝っており、<sup>(12)</sup>又別の伝えによると六〇七〜六〇六年 Sigeum で Mytilene 人ピッタコスに殺されている。<sup>(13)</sup>勿論これらの年代が絶対に正確なものであるとは言えないが、これを否定する根拠もないしペリアンドロスの全盛時代は約前六〇〇とするのが通説であるから、<sup>(14)</sup>Sigeum 植民は前六一〇〜五九五年の間に行なわれたと<sup>(15)</sup>考えられる。

我々はこの Sigeum への植民を確証するものとして前六世紀初期とみられる碑文を挙げる<sup>(16)</sup>ことが出来る。このイオニア方言とアッティカ方言で記された特異な碑文より我々は次の如き見解を引出せるのである。まず第一にこの Sigeum 人の一部がアッティカ方言を用いていた点からして、彼等はアッティカ出身の者であったと考えられる。第二に注目すべきは、これらアッティカ出身の植民者は Sigeum 人と呼ばれていた事実である。<sup>(17)</sup>従って Phrynon に依って設立された植民市 Sigeum はアテーナイよ

り政治的には独立したポリスを形成していたものと推定することが出来る。この点は Sigeium が如何なる理由、目的を持って設立されたかを検討することに依っても確認されるのである。そこで次に第二の問題点、Sigeium 植民の目的について検討しよう。

ところでこの問題に関しても従来の研究は大きく二つに分れて対立していたのである。一つは Berve に代表される見解で、彼に依ると Phrynon の指導下に行なわれた Sigeium 植民は典型的な 'Anoikia' すなわち母市より完全に独立したポリスの設立であったのである。従って Sigeium はアテーナイと何ら政治的に関連はなく、植民市の設立に於いてアテーナイの勢力拡大とかヘレスポントス方面への商業上の関心、特に黒海方面への通商路を確保するとかという目的を持ってなされたのではない。ソロン時代の様に党派に分裂していたアテーナイが何か国家として広い視野を持って海外で活動したとは考えられない。むしろこうした分裂状態の国家に於いて時の権力争いに敗れた貴族や不満分子或いは圧迫を受けた人々が母国を離れて海外に新しいポリスを形成するのが当時のギリシア人の植民活動において見られる一般的な傾向で、国家の組織的な拡大などは考えられないと Berve は見るのである。<sup>(18)</sup>

こうした Berve 説に対して Bengtson は全く反対の見解を取っている。<sup>(19)</sup> 彼に依ると Sigeium の植民市はアテーナイと政治的に密接な関係に立っており、植民市設立はアテーナイの対外発展の一環として行なわれたのであるという。こうした見解の根拠

#### 初期アテーナイの植民活動

として彼は植民指導者 Phrynon がアテーナイの將軍であったと伝えられている事や、<sup>(20)</sup>「アテーナイ人」が Phrynon を送ったとする伝承を挙げている。<sup>(21)</sup> しかしこうした後世の呼称でもって何かアテーナイの公的な地位を云々することはできないと考える方が妥当であろう。<sup>(22)</sup> この点、Ehrenberg がヘロドトスの文からしてアテーナイ人とミュティレーネ人の二国のいわば植民市戦争を両国の対立にみるのも又行過ぎと考えられる。<sup>(23)</sup> 又アテーナイの制度やアテネ女神の神殿があった事実も直にアテーナイとの政治的關係の存在を云々する根拠にはならない。制度や宗教が母市と同一であることは何ら特別な意味を有せず、ギリシア植民市設立の場合では一般に見られる現象であるからである。<sup>(24)</sup> 従って Bengtson 説より Berve 説が妥当ではないかと考えられるが、この推定が当を得たものである事は当時のアテーナイの内政状態を考察すれば明確に理解出来るのである。よって次にこの点に焦点を合せて検討してみよう。

当時のアッティカを考える場合まず問題になるのは前六三六年或いは六三二年と考えられるキュロンの反乱である。<sup>(25)</sup> この反乱に關しては種々な解釈が行なわれているが、問題の核心は Salamis 島帰属問題を中心とする対メガラ政策をめぐるアテーナイの有力貴族の対立にあったと考えられる。<sup>(26)</sup> ところで反乱当時一般民衆はまだ反貴族的な態度に出なかったが、後にしだいに対立は全ポリス的なものになって行き、これと平行して貨幣経済の浸透という経済変化もからみ合せて、前六〇〇年頃にはソロンが解決せねば

ならなかった社会経済的並びに政治的な危機が形成されていったとみられる。<sup>(27)</sup> こうした状況にあった当時のアテーナイが如何に弱体なポリスであったかは、アッティカ沿岸にある *Salamis* 島<sup>(28)</sup> easeasyに支配出来なかつた事実<sup>(29)</sup>に端的に示されている。如様なアテーナイがヘレスポントスの通商路をねらって *Sigeum* に植民を行えたであろうか。客観的条件は全く否定的である。第一に *Sigeum* はこつした海狭支配の目的にふさわしい所ではない。<sup>(29)</sup> また植民理由として、当時すでにアッティカは穀物の不足状態が生じていたと考えられるので、<sup>(30)</sup> 黒海方面からの穀物輸入が指摘されるが、もっぱら土地を求めた農業植民の性格を第一に持っていたと見るのが妥当と考えられる。<sup>(30)</sup> なぜならこの頃アテーナイは大きな勢力を持つてはおらず他国の交易に干渉しようとしたとは考えられないのである。アテーナイの商工業の発展の一つの尺度となる陶器もこの時期ではまだギリシア世界各地に拡大してはおらず、もっぱらコリントに次いで二流的な地位にあまんでいたの<sup>(31)</sup>である。さらにアテーナイの当時の対外面での不活発さはナウクラリアの制度にも反映している。この制度に関しては古来議論のある所だが、一般に前七世紀末に成立したと考えられている。<sup>(32)</sup> しかし史料から当時のアテーナイが何か大規模の海軍組織を所有して海外で活動していた様な事を推測することは出来ず、<sup>(33)</sup> むしろ反対に不活発であったと推定できることは前述のサラミス島の帰属問題をめぐる事件からも明らかである。ナウクラリアは海軍組織といつても単純なアッティカ沿岸の海賊排除がせいぜいのと

ころ目的であったとみられているのである。<sup>(34)</sup> 従つて前七世紀末の *Sigeum* 植民において、我々はアテーナイの何か国策的な拡大の理由をみつけることは出来ない。*Sigeum* をめぐつてアテーナイ人とミュティレーネ人が戦争をしたとの伝承から何らかの両国の対立を推定する見解もあるが、<sup>(35)</sup> 多くの疑問がある。<sup>(36)</sup> 当時のポリスには商業政策などみられなかつたのである。<sup>(37)</sup> では、一体如何なる人々が如何なる目的を持つて *Sigeum* の植民市を設立したのだろうかという大きな問題が残る。この点史料は全く沈黙しているので我々は幾つかの可能性を推定する以外に全く道はない。一つのヒントとして考えられることは、*Diogenes Laertius* によるソロンが *Chersonesos* に植民するように説いたという伝承である。<sup>(38)</sup> この伝承と *Sigeum* 植民の関係、及びソロンがなぜ *Sigeum* 植民に関係した伝えがないか等解明し難い多くの問題があるが、植民を説いたソロンとは一体如何なる人物であったのだろうか。その詳細はともかく注目すべき点は彼が当時のポリス社会での典型的、理想的な人物とみなされており、<sup>(39)</sup> 又当時の中産市民の代表者でありながらエジプトなどの商業に多くの関心を持っていた事実である。<sup>(40)</sup> 当時は古典期と異なりまだ商業に従事する人々が特別の階級とみなされていたのではなく、<sup>(41)</sup> 貴族も土地経営を中心としながらも商業に手を出していたのである。すなわち土地所有者たる貴族と商業に従事する人が明確に区分されておらず、<sup>(42)</sup> 両者の関係は古典期と異なり極めて流動的であったのである。ソロンはこつした当時の市民の代表者と言える人

であり、広い視野に立って商工業に関心を持っていたので Chersonesos への植民を説いたのである。こうした商業に従事した貴族の他の例としてアテーナイの有力な家柄であったアルクマイオニダイを指摘することが出来る。<sup>(43)</sup>

当時の貴族と商業がこうした関係に立っていたとすると Sig-eium 植民市設立もこうした商業に関心を持っていた貴族を通じてアテーナイ国家の政策と何か関係があったのではないかと考へられる。確かに植民市の設立は当然ながら母市の様々な状況と密接な関連があった。<sup>(44)</sup>しかし前に述べた如く当時明確な商業政策の意図を持ったポリスの動きはみられないのである。ところで Sig-eium 植民の主体者として如何なる人々が考へられるのであるか。第一に考へられることはソロンのように海上交易に関心を持つ人々によって商業上の関心特くに穀物輸入の為に植民したという見解である。<sup>(45)</sup>或いは Sig-eium 附近で有名な紫貝を求めていったのであろうか。<sup>(46)</sup>それとも植民は六三〇年前後行なわれ、キユロンの乱と関係して、キユロン派の人々がポントス地方に勢力を持っていたメガラ人の援助のもとに設立したのであろうか。<sup>(47)</sup>或いは貴族に圧迫されていた民衆が新天地を求めて植民市を設立したのであろうか。<sup>(48)</sup>これらの推測の内いずれが妥当なのか確実な所は史料から不明である。しかし注目しなければならないのはこうした幾つかの可能性の中に何かポリスとしての積極的な植民政策というようなものを見る事が出来ないという点である。ここにこそ当時のポリス社会の重要な特質が反映されているのではなかる

### 初期アテーナイの植民活動

うか。すなわち当時のポリス社会は古典期ペリクレス時代の市民権限定法が存在し、外交も可成り一定の方針のもとに行なわれていたような時代と異なり、まだポリス社会の枠が固定化せず割に拘束が少ないといおうか、自由であったといおうか余り組織的なポリスの型態はいまだ成立しておらず、例えば有力な貴族などはポリスの拘束を余り受けることなく比較的自由に活躍出来たのではないかという点である。ところでこうした特徴は植民活動だけでなく当時のポリス社会の他の面からも実証出来るだろうか。確かに出来るのである。その一つは市民権に対する人々の考え方で、当時はまだ古典期程に市民権賦与に於いて封鎖的な態度は見られないのである。<sup>(49)</sup>ソロンはアッティカの商工業の発展を促進する為に他国より一家をあげてアッティカに移住した人々に市民権を与えているし、<sup>(50)</sup>ペイストラトス時代にもかなり本来アテーナイの市民でない人が市民権を保持していたらしい。<sup>(51)</sup>又 Chersonesos の支配者小ミルティアーデスはマラトンの戦いでアテーナイの将軍として活躍しているのである。<sup>(52)</sup>

こうしたポリス社会の枠の「緩さ」は市民権に対する考えにのみでなく、さらに個々のポリスを越えた貴族の動きにも顕著に見られる。<sup>(52A)</sup>アテーナイのアルクマイオニダイと並ぶ有力な貴族であったフィライダイの一人大ミルティアーデスの父 Kypselos はクリントの僭主 Kypselos の娘の子供である。<sup>(53)</sup>前七世紀末に反乱を起したキユロンはメガラの僭主 Theagenes の娘を妻としていたのである。<sup>(54)</sup>又シュキオンの僭主クレイステネスが娘の婿を求めた

時、アテーナイの貴族アルクマイオニダイの Megacles を始めとして数人の他のポリスの貴族も求婚をしたのであった。<sup>(55)</sup> 僭主を倒して有名になったハルモディオスとアリストゲイトンの家も他のポリスからアテーナイに入ってきたと伝えられている。<sup>(56)</sup>

さらにこうしたポリス社会の「緩さ」は前六世紀中頃僭主ペイシストラトスの時代の Sigeum や Chersonesos などの植民市設立や設立後のアテーナイとの関係にも明白に見出されるのである。

ところでこれら二つのペイシストラトス時代に設立された植民市についても前時代の Sigeum 植民と同様に Berve 説と Bengtson 説との両極端に分れた解釈が行なわれていた。<sup>(57)</sup> ここではこうした二つの見解の検討は省略するが全般的に言えば母市と植民市との密接な関係を主張する Bengtson の説がより正しいといえる。しかし彼の見解で全てを単純に割り切れない面がある。結論を先に言えば、アテーナイの僭主制という特殊な事情によって母市と植民市の関係にはかなり強い結びつきが見られる。だがこの結び附に何か組織的なものがあったかという点を決してそうでない。僭主追放後のアテーナイと植民市の関係は再び割に疎遠なものに変わっていつているのである。この点をまず Sigeum の再植民から検討してみよう。

前七世紀末期アテーナイ人により植民された Sigeum は後再びミュティレーネ人によって占取されたが、前五三〇年頃ペイシストラトスにより取り返され、彼の庶子 Hegesistratos の支配

下に置かれたのである。<sup>(58)</sup> Berve はこの再植民が全く僭主個人の行動に基ずくものと見ており、植民目的は僭主自身の制覇強化にあったとしている。<sup>(59)</sup> すなわち一つには僭主を支持した人々に土地を与え、アテーナイでの自己の権力保持の強化をめざし、同時に自分の子供を植民市に送り出すことにより僭主の後継者問題を解消し、又有事の場合には植民市を避難所にする目的があったとしているのである。

同様に前五六〇〜五五六頃に行なわれたとみられる<sup>(60)</sup> Chersonesos の植民に関しても Berve は全く個人的な意図から出たとい<sup>(61)</sup>と解釈している。彼の見解によればこの植民はヘロドトス VI 章 34 節以下に伝えられている如くペイシストラトス家と対立するフライダイの大ミルティアアデスがペイシストラトスの僭主政を嫌って植民したのであって、アテーナイのヘレスポントスの通商路支配とかいった意図はなかったとしている。

しかし彼の見解には幾つかの問題がある。まず第一の大きな問題点はペイシストラトス家とフライダイの関係である。従来両家の対立はヘロドトスの伝えからかなり確実なものとして考えられてきた。ところが最近発見されたアルコンリストによって、僭主がアテーナイを支配していた時に今まで僭主とは対立関係に立っていたと考えられていたフライダイやアルクマイオン家の出身者がアルコンになつていた事実が明らかにされた。<sup>(62)</sup> これによって従来のヘロドトスの見解が全面的に信用出来ないことは明らかで、僭主とフライダイの対立は根本的なものではなく多分に個

人的な色彩を持ったものであったと考えられる。<sup>(63)</sup>すなわち両家の対立はハルモディオスとアリストゲイトンの僭主殺害事件の原因<sup>(64)</sup>や僭主時代のアテーナイとスパルタとの友好が多分にペイシストラトス個人の手腕によっていたように根本的なものではなかったであろう。従って大ミルティアードスの植民行動はかなり独立的な性格を持っていたかも知れないが、後に小ミルティアードスが植民市に向うにあたりペイシストラトスが船を与えている点から考えて、<sup>(66)</sup>僭主の関心や意図と全く関係なく植民したとは考えられない。<sup>(67)</sup>この点はペイシストラトスの取った政策を考えれば場合特に明らかとなるのである。

彼が植民市設立や商業上の活動に多大の感心を持っていたことは、第二回目の追放に遭った時トラキア方面の鉾山の開発にあたり、<sup>(68)</sup>各国の僭主や寡頭派の人々と交友関係を保つことにつとめたことや、<sup>(69)</sup>Die説はともかくとしてアテーナイの商工業発展に力をつくしたことからして理解できるのである。当時アテーナイの陶器が漸次地中海全域で主力を占めるようになった事実もこの傾向を確認するものと言える。<sup>(71)</sup>又黒海方面からの穀物輸入もこの時代にはかなり重要になったとみられるので、<sup>(72)</sup>こうした点からもケルソネーソス及び Sigeum 植民を単なる個人的な活動をもって性格づけることは出来ず、むしろ商業上の関心が多分にあったことが認められなければならないことは明白である。<sup>(73)</sup>如様な商業上の関心から僭主が植民市を作ったことはコリントの僭主ペリアンドロスの政策などに典型的に認められるのでありペイシストラ

#### 初期アテーナイの植民活動

トスの政策もこれと揆を一にするものであったとみてさしつかえない。<sup>(74)</sup>

しかしながら同時に注意しなければならないのは、こうした植民市が母市アテーナイと何か明確な法的形態を持って関係していたとは考えられない点である。伝えによると前六世紀末ペイシストラトス家の僭主制が倒された時、ヒッピアスはアテーナイを去って Sigeum に引上げているのである。<sup>(74A)</sup>こうした行為はこの植民市がアテーナイのものであると考えられておらず、植民者もアテーナイ市民とみなされていなかった事実を示すと考えられる。<sup>(75)</sup>ずっと後であるが、デロス同盟に於いて Sigeum, Chersoneros 両市共に貢賦金を払っている事実もこれらの植民市が普通のアポイキアであったことを示していると解釈出来よう。なぜならデロス同盟成立前にアテーナイによって作られたアポイキアは同盟成立後に作られたのと異なって貢賦金を払ったと考えられているからである。<sup>(76)</sup>

他方前六世紀末ケルソネーソスに行った小ミルティアードスの動きを見るとこの植民市がアテーナイと全く断絶していたとは考えられない面もみられる。ヘロドトスによると小ミルティアードスはアテーナイに戻ってから政敵によってケルメネーソスにおいて僭主としてふるまったとして告訴されているのである。<sup>(77)</sup>この点、Berve は小ミルティアードスが釈放された事から彼がアテーナイ人でなかったと見るのに対して、Bengtson は小ミルティアードスがケルソネーソスで僭主としてふるまうたからこそ告訴され



たと考えているのである。<sup>(78)</sup>この内いずれの見解が正しいのであるうか。問題は小ミルティアードスがアテーナイ人であったか否かにかかるとは、彼の如き「特殊な人」からして一般的な結論は出せないとして、植民市の市民の法的性格を簡単に云々することは不可能と考える人もいるが、<sup>(79)</sup>小ミルティアードスは数十年も前にアテーナイを去っているので、我々はこの裁判事件に何かアテーナイ市民であったか否かという法的な問題を引出すことに固執するよりも、もっと簡単にクレイステネスの改革後の民主化されたアテーナイ人にとってはいずれのポリスの市民ということには関係なく単に僭主なる事実が告訴の十分な理由になりえたのであると考へて良いのではないか。<sup>(80)</sup>

ところで小ミルティアードスによってオリンピアに奉納されたヘルメットに「ミルティアードス、ゼウスに奉納」と書かれている事実は彼がアテーナイ人としてよりもケルソネソスの僭主として奉納した事実を示していると考えられる。<sup>(81)</sup>とすると彼がアテーナイの將軍になった事実はどの様に解釈したら良いのだろうか。彼がアテーナイの市民であったればこそこうした大役につくことが可能であったと考へられるかもしれない。<sup>(82)</sup>しかし以上の考察からして彼がアテーナイ市民であった可能性はかなり少ない。彼が將軍になった事はアテーナイの有力な貴族の家柄出身であったことや、ペルシア戦争という特殊な事態であったことに起因するのであって、そこに何か法的な市民権という問題を考へなくとも理解出来るのではないか。そして小ミルティアードスの動きの中に、クレイステネスなどの改革によつ

て制度的にはかなり確立していたとしても、実際面ではまだ前の時代のポリス社会の緩さが反映されているとするのは楽観的すぎる見解であろうか。

ではこうしたポリス社会としてのアテーナイが何時クレールキアを設立する様なポリスへと変っていったか。制度的には前六世紀末から五世紀にかけてのアテーナイの民主化の中に求められるが、特に大きな契機はやはりデロス同盟であったと考へられる。<sup>(83)</sup>

以上、これら二つの植民市の検討から我々は、前六世紀の僭主時代の植民市は前の時代よりかなりアテーナイとの密接な関係がみられ、そしてそれはアテーナイの政治経済の発展を反映しているが、これも主に僭主といういわば特殊な状態下に生じた関係であり、僭主を考へなければやはりアテーナイと植民市の関係は薄いものであり何ら緊密な関係はみられない。前の時代の *Sigeium* 植民と同様に多分に個人活動といえるような色彩が残っていると結論することが出来る。

### (三)

以上アテーナイの初期植民活動を、母市アテーナイと植民市の関係及びそこにおける個人の動きを中心に検討して来た結果、次の様な点が指摘されよう。

この時代の史料は少なく近代の学説は多くの問題点において鋭く対立している。しかしこれまで論じて来た様に、時として矛盾

する史料を合理的に一つに解釈するよりむしろこうした史料が残されることになったのは当時のポリス社会が厳格な枠を持っていなかったことに起因すると考えるのが正しいのではなからうか。すなわちこの時代はポリスそのものがまだ十分に確立していなかった、或いはむしろ古典期のポリスに比較して割に拘束のない自由な活動が可能であった社会であったと考えられる。こうしたポリス社会であればこそ、母市と植民市の関係及びそこにおける個人の地位の曖昧さが生じたのであり、多くのクレールキアが設立された前五世紀とは異質な社会の性格が示されているのである。この時代は大局的にみれば前七世紀末期頃より漸次動揺して来た貴族社会と、前六世紀の古代民主制の確立期の間当るもので、割に国制の拘束力は弱く個人は自由に活動出来たのである。当時ギリシア世界各地に多くの僭主が抬頭したことの一因は正にこの点に求められると考えられる。又哲学、文学等の各分野もこうした社会に於いてこそ特徴ある発展が可能であったのであろう。<sup>(83A)</sup>

従来この時代は単に古典期の前段階としてのみ評価されて来た傾向があるが、この時代こそギリシア人が自由に活動した輝やかなしい時代であり、経済面を見れば幾つかの曲折はあったが商工業も漸次発展して行き、民主制への道もすでに明確な第一歩を踏み出していくようになり、精神面に於いてはまだ小アジア中心ではあったがイオニア哲学が發展し、又サッポーをはじめとする多くの秀れた詩人達が活躍した時代で、こうした動きは少し後にな

#### 初期アテーナイの植民活動

るがペイシストラトス下のアテーナイにも明確に見ることが出来、真に無限の可能性に富んでいた時代であったのである。<sup>(84)</sup> こうした意味に於いて前七世紀末から前六世紀の時代は単に古典期の前の時代としてではなくそれ自身極めて重要な時代であった事をもっと高く評価すべきであると考えられる。 (元)

註

(1) Bengtson, H. Griechische Geschichte, 3. Aufl. 1965. München. p. 86-99. (以下 Bengtson. GG と省略)。

(2) Gomme, A. W. A Historical Commentary on Thucydides, vol. I. p. 120. Oxf. 1950. はイオニア植民に依って当時のアテーナイには過剰人口の問題がなかったと考えている。他方 Ehrenberg. V. [Zur Älteren Athenischen Kolonisation. (Polis und Imperium. p. 221-244 所収。1965. Stuttgart.)]. (以下 Ehrenberg) は植民するような民衆が貴族の拘束下にあった為かと推定している。

(3) 拙稿「クレールキア考」I「史学」vol. 41. III. (1968). p. 142-144.

(4) Thucydides (以下 Thuc.) I. 34. 久保正彰訳、岩波文庫。  
(5) むろん *κρησινια* という植民市の形はアテーナイの特殊な植民市であり史料的には前六世紀末、碑文的には前五世紀中頃から知られているのみである。(注(3)みよ)。しかし母市と植民市関係を従属的なものとみる見解と、反対に、両者相互に独立しているとみる見解に諸家が分れていることは確かである。

一例をあげた。前著の見解を敢て Meyer, E. に反して後著の  
説を敢て Berve, Hammond が採つたのは、

- (9) Gwynn, A. The Character of Greek Colonisation.  
JHS. 38. (1918) p. 111f.
- (10) Strab. XIII. 599f. Diog. Laert. I. 74. Hdt. V. 95.
- (11) Geschichte des Altertums. 4 Auf. vol. III. 1965.  
Stuttgart. p. 589. n. 1; p. 595-7. [以下 Meyer GdA]°  
の理 Bengtson, G. G. p. 118; Adcock, Cam. Ancient. Hist.  
vol. IV. p. 52; Busolt. G. Griechische Geschichte bis zur  
Schlacht bei Chaeroneia. vol II. 2 Auf. Gotha 1895 p.  
249-; 以下 Griechische Staatskunde. II. p. 799. 1924,  
München [以下 SK] 以下採つたのは、
- (12) Beloch, K. J. Griechische Geschichte. I. ii. 2Auf.  
1926. Leipzig. p. 314-318.
- (13) Page, D. Sappho and Alcaeus. Oxf. 1965 (1955) p.  
149-161. 以下 p. 155-158. [以下 Page]°
- (14) Treu, M.(ed) Alkaios Lieder. 2Auf. 1963. München  
p. 114f. p. 128-9. Page p. 159f.
- (15) Diog. Laert. I. 74. Eusebius. I. 199 Schol. 彼の優美  
種目を中心して確美のふいふが不明である。 Page p. 157. n. 2 参  
照。史料の詳細は Busolt G. G. II.² p. 249. n. 1 を参照。
- (16) Busolt, G. G. loc. cit.
- (17) 例は Bengtson G. G. p. 111; Glotz. G. Histoire Gre-

que 1. 1925 Paris p. 320.

- (18) Busolt G. G. p. 249. n. 1 (p. 252) Meyer. GdA vol. 3,  
p. 596. 以下○○年頃と云ふのは大体 Busolt の回答をな  
す。前後の数年の差が歴史的に重要な意義を持つて来る  
ことはある。

(19) Dittenberger. W. Syll.² 2.

A

*Φανοδίχο ἐμί τὸ δημοκράτεος τὸ Προκουρητίο κηστῆρα  
δὲ : καὶ ὑποκορητῆριον : καὶ ἡδμὸν : ἐς πρυτανῆριον ἐδ-  
ωκεν : Συκεῦστω.*

B

*Φανοδίχο : εἰμί : τὸ δημοκράτος : τὸ Προκουρητίο :  
κηστῆρῶ : κηστῆρα κηστῆρατων : καὶ ἡδμὸν : ἐς πρυτα-  
νηριον : ἐδοκα : μεῖμα : Στρευῖται : ἐὰν δέ τι πάσχο,  
μελεδαινευ : με, ὁ Στρεῖς : καὶ μετῶτασεν : χαίσστος  
καὶ : χαδελφοί.*

年代に關しては譯文の如くふいふだが一般に前世紀初頭と考  
へられる。 Buck, C. G. The Greek Dialects, 1955 Chi-  
cago. p. 184; Dittenberger. loc. cit. cf. Boardman. J. The  
Greeks Overseas. Penguin Books 1964. p. 277 [以下 Bo-  
ardman]. Bengtson G. G. p. 101.

- (17) Boardman p. 277 の述ぐる様子の特殊な碑文の記述は  
た事情を容易に推測し難いから、上列の見解は Ehrenberg p. 222

- 及び Berve H. Miltiades, Studien zur Gesche des Man-  
nes und seiner Zeit. Hermes Einzelschriften Heft 2. 1937  
Berlin p. 30-31. (以下 Berve. Miltiades) 以下同。
- 他方 Graham, A. J. Colony and Mother City in Ancient  
Greece. 1964 Manchester p. 192-193. (以下 Graham) 以下  
同様。碑文から植民者の法的地位を引出すことと反対として  
no. cf. Bengtson H. Einzelpersönlichkeit und atheni-  
scher Staat zur Zeit des Peisistratos und des Miltiades.  
(Sitzungsberichte der Bayerischen Akademie der Wis-  
senschaften. Philosophisch-historische Abteilung. 1939.  
Heft I.) p. 21-22. (以下 Bengtson. Einzelpersönlichkeit.)
- (87) Berve. Miltiades p. 28-31.
- (88) Bengtson. Einzelpersönlichkeit 註 p. 20-22.
- (89) Suidas, s. v. *Μιττακός. καὶ Φύβωνα στρατηγὸν*  
*Ἀθηναίων πολεμοῦντα ὑπὲρ τοῦ Στρείου μονομαχῶν*  
*ἀπέκτεινε* (以下タロク) 以下同。
- (90) Strab, XIII. 599. τοῦτο (以下タロク) δὲ κατέσχον μὲν  
*Ἀθηναῖοι, Φύβωνα τὸν Ὀλυμπιονίκην πέμφαντες, ...*
- (91) Graham. p. 33. n. 3. Berve. Miltiades. p. 30. n. 1.
- (92) Ehrenberg p. 222. Hdt. V. 94. ἐπολιόμεν... ἐπὶ γούρου  
*οὐχὸν Μυρταλλῶναι τε καὶ Ἀθηναῖοι.*
- (93) Thuc, VI, 4. 3; 5. 1. 註釋は SK. p. 1269f. 參照。古くは  
すでにホメーロスにも如様なことが歌われてゐる。
- (94) Thuc, VI, 4. 3; 5. 1. 註釋は SK. p. 1269f. 參照。古くは  
すでにホメーロスにも如様なことが歌われてゐる。
- (95) Od. VI. 7-11.
- (96) Thuc, I. 126; Plut. Solon, XII; Hdt, V. 71-72. 年代  
については大ニ〇世紀後半の説は有力である。Bengtson. G.G.  
p. 117. Meyer. GdA. III. p. 591. 以下は大ニ三世紀  
なかれ決定し難い。cf. Busolt. G.G. p. 204-208. 最近の邦文の研  
究としては三浦一郎「キクロンとペイニストライス」学生社  
古代史叢書 vol. XI. p. 85-121. 参照。
- (97) Hopper, R. J. "Plain", "Shore", and "Hill" in Ea-  
rly Athens. Annual of the British School at Athens.  
vol. 56. (1961) p. 189-219. 註は p. 208-217.
- (98) Meyer. GdA. p. 591-4. 以下の説は註に於いては最近の  
研究も未熟である。この問題は後の機会にゆずる。なお最近の  
研究は貨幣鑄造開始年代を前七世紀後半とするのが通説となつて  
ゐる。この問題については邦文では「清水昭次「小アジアの貨幣  
貨幣鑄造開始年代」(西洋古貨幣研究 XVII. p. 11-21. 1969) 參  
照せよ。
- (99) Plut. Sol. 10, 12.
- (100) Berve. Miltiades, p. 34. Page. p. 158. n. 2.
- (101) Bengtson p. 122.
- (102) cf. Busolt. G.G. II. p. 249.
- (103) Cook, R. M. Greek Painted Pottery, London. 1960.  
p. 78, p. 61-2.
- (104) Busolt G.G. p. 191. SK. p. 817-8. p. 770-1.

- (33) Busolt op. cit. によれば Sigeium 植民にナウクラリー  
ア等の艦隊の存在が予想されるという。
- (34) Bengtson p. 119.
- (35) 注(23)
- (36) Strab. XIII. 599 を Ehrenberg p. 222. のように解釈  
する。
- (37) ハーゼブレンク「都市国家と経済」原、市川訳、p. 201。
- (38) Diog. Laert. I. 47. Berve. Miltiades p. 11 n. 1 はこの  
伝承を否定する。しかし否定の根拠はないと考えられる。  
ATL. vol. III. p. 289. n. 75 にある Phrynon は Cher-  
sonesos の Elaious にも植民したとしている。しかし修復の  
点従来この見解は疑問視されている。他方 Boardman は前六  
世紀初頭 Elaious がアテーナイによって設立されたとしてい  
る。ンロンもこの動きの中に参加していたのであろうか。
- (39) Meyer. GdA. III, p. 601f. Aristoteles 「アテーナイ人の  
国制」 V. 3 (引 Arist. AP.); Politeia 1296a. 19. 1273b. 34;
- (40) AP. XI. i.; Plut. Solon. 25.
- (41) Meyer GdA. III. p. 595.
- (42) 両者の流動性は村川堅太郎氏の「貴族と農民」(筑摩書房  
版、世界の歴史 vol. IV. p. 252-266) が明解に分析しておら  
れる。
- (43) Meyer GdA. III. p. 595, 589.  
三浦一郎「アルクマイオニダイの富の形成について」上智史学  
vol. XV, p. 1-13.
- (44) 例えば Hdt. IV. 147f. のテラ植民、Arist. Polit. V. 7.  
1306B のタラス植民、他の例は SK. p. 1264f 参照。なおタラ  
ス植民については清永昭次「ブルテニアのタラス植民」学習  
院史学 vol. 7 (1970) p. 1-14. 参照。
- (45) しかも Hdt. IV. 152 に伝えられているサモス人の様に国  
家の政策とは余り関係なく植民したと考えられる。cf. Hopper  
p. 213. Meyer. GdA. III. p. 595.
- (46) Hopper p. 213 n. 218.
- (47) メガラ人はこの方面に大きな力を持っていた。Meyer.  
GdA. III. p. 583.
- (48) Busolt. GG. II, p. 249. n. 1 参照。
- (49) この問題については馬場恵二「アッティカにおける非市民  
の不動産所有」(史学雑誌 71. vol. 8, p. 1-34) 等、氏の一連の  
研究が極めて有益であった。
- (50) Plut. Solon. 24. かつ本文の解釈には多くの議論があ  
る。
- (51) AP. XIII. 5. SK. p. 861. n. 4; Busolt GG. II p. 310.  
n. 2.
- (52) 彼については後述する。
- (53) A) Lacey. W. K. The Family in Classical Greece;  
Ithaca 1968. p. 67-68.
- (54) Berve. Miltiades p. 3-4; Bradeen, D. W. The Fifth-

- Century Archom List. (Hesperia 1963) p. 196-7 (Bradeen)
- (4) Thuc, I, 126.
- (15) Hdt. VI. 126-130.
- (19) Hdt. V. 55-61. 前者のアーテナーナイに來た年代は不詳だが。
- (17) Berve Miltiades ; Bengtson, Einzelpersonlichkeit. Ehrenberg もよむらふかと言えは後者の範疇に入れられるであらう。
- (18) Hdt. V. 94. 年表のころは Berve. Miltiades p. 29.
- (19) Berve. Miltiades p. 31-33.
- (20) 植民年代は不詳。Berve. Miltiades p. 3. Busolt. GG. II. p. 374; Graham p. 32 彼の年代を取る。しかし Bradeen p. 194. 前五四〇年代も同様に可能であると思はれる。
- (18) Berve, Miltiades p. 11f.
- (22) Supplementum Epigraphicum Graecum. X. 352. この碑文がはたしてアルロンリストか反対意見がなからぬならば (Alexander, J.W. Was Cleisthenes an Athenian Archon? Class. Jour. LIV (1958/9) p. 307-314) なる Bradeen, Meritt 及び Meiggs R; Lewis D. A Selection of Greek Historical Inscriptions. Oxf. 1969. No. 6. 前アルロンリストをとりうるのころ、むしろ「アルロン説」を採用してはなすべし。この碑文によつて Miltiades の歴史は再検討をねがはねばならぬ
- (25) Wade-Gery, H. T. Miltiades. (JHS. 71(1951)) 及び Hammond N. G. L. The Philaidai and the Chersonesos. Class. Quart. 1956. p. 113-129. 結論としては、但し三人の Miltiades を兼ねる Hammond 説は問題があるべきだ。
- (23) Meiggs, Lewis. op. cit. p. 11. Wade-Gery. op. cit. p. 214.
- (14) AP. XVIII. 2.
- (15) Hdt. V. 63 参照せよ。
- (19) Hdt. VI. 39. 1.
- (22) Busolt, GG. II. p. 316. Ehrenberg. p. 224f. Andrewes, A. The Greek Tyrants. 1964 (1956) London p. 105.
- (18) Hdt. I, 64; AP. XV. 2.
- (19) Hdt. I, 64. V. 63 Ap. XVII. 4.
- (20) Ure, P. N. The Origin of Tyranny 1922. p. 33-67.
- (17) Cook, op. cit. p. 78. Dunabain, T. J. The Western Greeks 1948. Oxf. p. 62.
- (22) Bengtson, GG. p. 135.
- (23) 商業発展や余の重視したところ Hasebraeck の「アンタルン」の場合にわたる歴史を踏まへる。Griechische Wirtschaft- und Gesellschaftsgeschichte. 1931. Tübingen p. 195-6; 226.
- (14) Meyer GdA III. p. 576-. Nilsson, M. P. The Age of

Early Greek Tyrant 1936. Belfast p. 23. cf. 清永昭和「ペリアンドロスの奴隷取得禁止令」史学研究 No. 294 (1964) p. 3f.

〔後記〕 本小論は一九七〇年二月の三田史学会に於ける発表草稿を一部修正、出典を加筆したものである。

(74 A) Hdt. V. 65.

(75) Graham, p. 193.

(76) The Athenian Tribute Lists (ATL) vol. III. p. 286; 貢賦金の額について ATL vol. III. p. 27f & Hill. Sources for Greek History 2ed. 1951. Oxf. p. 406-9. 参照。

(77) Hdt. VI. 104.

(78) Berve, Miltiades p. 23f. Bengtson, Einzersonlichkeit p. 18-19.

(79) Graham p. 195-6.

(80) AP. XXII. 6 には僭主の友人がオストラキスモスに遭ったことについて。

(81) cf. Graham p. 195-196.

(82) Bengtson & Kahrstedt, U. Der Umfang des athenischen Kolonialreiches.

(Nachrichten von der Gesellschaft der Wissenschaften Göttingen 1931) p. 161.

(83) 拙稿「クレュールキー考」参照。

(83 A) この点の詳細な実証はこれからの問題として残しておく。

(84) Nilsson p. 4f.